

座談会

李春子×大谷一弘×北村正隆
日・韓・台の鎮守の杜



新撰 淡海木間撰 47

横井金谷筆

山居図

INFORMATION STATION

催し案内

2011年春

MYBOOK

自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS

サンライズ出版の新刊案内



座談会

日・韓・台の鎮守の杜

李春子（イ・チュンジャ）

韓国・釜山出身。関西大学・神戸女子大学非常勤講師。台湾大学卒業。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。

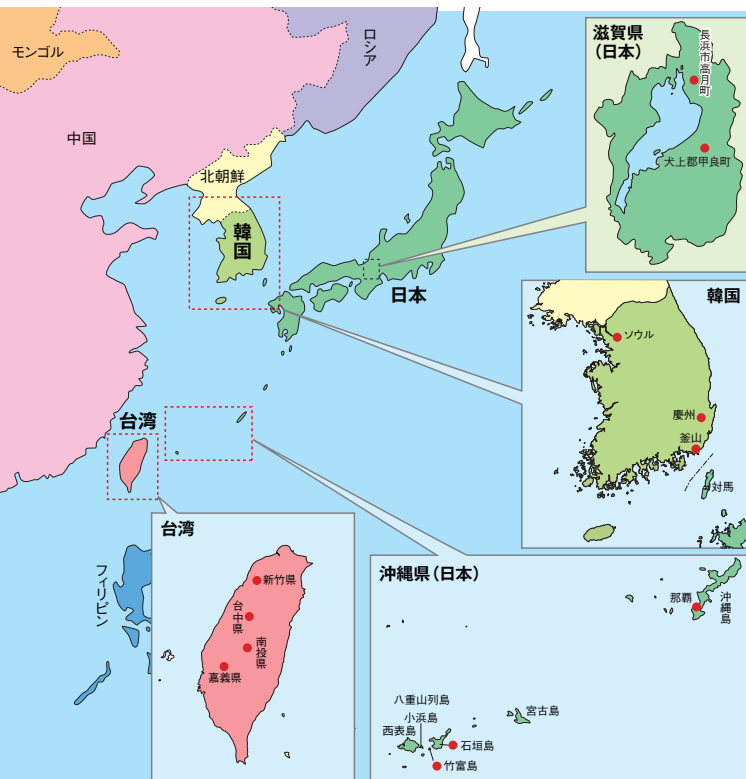
下の地図は李さんの主な調査地

大谷一弘（おおたに・かずひろ）

近江八幡市立安土中学校教員。滋賀植物同好会幹事。同会編『近江の鎮守の森』『近江の名木・並木道』『近江植物風土記』などの著書がある。滋賀県近江八幡市在住。

北村正隆（きたむら・まさたか）

有限会社景樹園代表取締役。樹木医・一級造園施工管理技士。滋賀県米原市在住。



▲滋賀県長浜市高月町柏原のケヤキ。毎年8月16日に「野神祭」が行われる。近くの高時川が氾濫したさいには、枝を切って堤防を守ったとされ、枝を切った後にできたコブが多い。

日本のご神木や「野神さん」、韓国の「堂山ハラボジ（お爺さん）」、台湾の「大樹公」——。東アジアに共通してみられる“鎮守の杜”を研究しておられる李春子さんとその調査に同行なさった滋賀県在住のお二人にお集まりいただき、人々と巨木の関わり方をお話しいただきました。

▼ソウル市松坡區文井のケヤキ。毎年1月15日と端午節に祭りがあがる。[6ページ右上の写真も同じ木]



東アジアに共通する自然に対する信仰

▽まずは、日本、韓国、台湾の鎮守の杜についての調査に至る経緯を、自己紹介も兼ねてお話しただきたいのですが、李さんは来日なさるまでは…。

李 私は釜山女子大学を出て、大韓航空に4年半ほど勤めました。地上での秘書の仕事だったのですが、その間にちょうど金賢姫による大韓航空機爆破事件（1987年）が起きました。そんな時に、やがて中国の時代が来るのではないかと思い、中国語の勉強を始めました。仕事に疲れて「何か、勉強したい」と思い始めた時期でもあり、思い切って会社を辞めました。

▽大学に入り直されて。

李 一番の目的は、中国に行きたかったのです。けれど、当時は両国に国交がなくて（韓中国交正常化は92年8月）ビザが出ない。とりあえず、中国語を学ぶために台湾へ行ったら、長く滞在することになりました。以前から興味があった人類学を勉強するため、台湾大学に入学したからです。台湾は韓国と同様、日本の植民地となった歴史がありますが、人々は韓国とまったく違う日本人観をもっていることを知りました。▽台湾は、親日的ですね。

李 同じ経験をしていても政策や見方が違うことから、東アジア全体を勉強する必要性を感じて日本に行くことにしました。釜山女子大の頃に日本語学を選択していました。来日したのが、1997年（平成9年）、14年前ですね。

鎮守の杜の研究のきっかけは、当時、京都大学におられた蘭田稔先生（そのだのさとし）のところにかがったことです。通常の宗教学は、概念的、精神的な面を研究しますが、杜というのは、そこにある実体、生きている対象

でありながら、宗教としても研究ができる。これはすごい。なおかつ、韓国も、日本も、台湾にも同じように自然の信仰があることに気づきました。

東アジアの国々の関係を語る場合、歴史や政治的な問題がありますが、対象がどの国でも共感できるものであれば、そうした問題を越えてお互いわかりあえ、これからの平和につながるでしょう。まあ、私の研究は極めてローカルなもので、どのぐらい意味があるかはわかりませんが。

修士課程のテーマには、福井県の大島半島にある「ニソの杜」を扱いました。いま

関西電力の原子力発電所がある、小浜湾に面した大飯郡おおい町というところですよ。その、24のご先祖の神様の杜に対する信仰を調べました。ただ、1970年代に原発の建設が始まり、建設地内にあった神様の杜の木が切り倒されたり、信仰が途絶えるなどの大変化があった後でした。そこで、そうした変化と今後の神社の保全がどう結びつくかを研究しました。

▽滋賀県内の鎮守の杜調査で、大谷さんに声をおかけになったのは、どういう経緯で。李 大谷さんとお知り合いになれたのは、サンライズ出版の淡海文庫『近江の鎮守の森』という本がきっかけです。あの本は5冊も注文して配ったりしました。

▽大谷さんは、人間と植物との関わりにもご関心がおありなのだと思いますが、中学校でご担当の教科は？

大谷 理科ですが、好きなのは社会科です（笑）。なかでも、地理や歴史の分野、要するにフィールドが好きなのです。子供の頃から植物は好きだったので、きっかけは宮沢賢治の「虔十公園林」というお話

※1 蘭田稔 1936年埼玉県生まれ。宗教学者、京都大学名誉教授。現在、秩父神社宮司。

※2 ニソの杜 おおい町大島地区の開発にあたった先祖をまつと伝わる聖地で、11月22日もしくは23日に祭祀を行う。この習俗は、国の選択無形民俗文化財。

※3 宮脇昭 1928年岡山県生まれ。生態学者、横浜国立大学名誉教授。ポット苗を用い、土地本来の植生に適した森造りを、国内外で実践。

です。ある少年が荒地地に木を植えて、そこがやがて子供たちが憩う場になるという短編です。小学生の国語教科書に載っていたのですが、非常にひかれて、それから、山へ行つて木に関心を持つようになりました。

もう一つは、学生時代に出会った『植物と人間』という本です。近年、「木を植えた男」と呼ばれ、世界的に有名になっておられる宮脇昭さんが書かれたもので、植生について教えられました。日本で、何のお化粧もしていない、素顔の本物の植生が残されているのが鎮守の杜なのだ書かれています。その辺りから、特に鎮守の杜というのを意識して観察を続けてきました。▽鎮守の杜といった場合、神社の境内に加えて、今回の調査では、「野神」と呼ばれる巨木なども含むわけですね。

大谷 はい。ほとんどの神社にある注連縄を張られたご神木に限らず、田んぼの一角の道端にある一つの木にも小さな祠（ほこら）があつて、信仰の対象になっていたことに気づき出すと、どんどん広がっていきました。

李さんのお話でも、東アジアには、自然に一つの神を認める共通する考え方があるとのことでしたが、例えば、奈良県の桜井市、ここは大神神社という、山そのものをご神体としている神社があることで有名なのですが、もう一つ、天一神社という神社

も変わっていて、囲いの中に、スギの木が1本あるだけなのです。

▽社殿などは何もなくて…。

大谷 スギの木しかないのですよ。その木がご神体なのです。また、三重県の熊野にある花窟神社、滋賀県でも東近江市の太郎坊山は、巨岩がご神体になっている。有名な那智大滝（和歌山県）は水の流れがご神体になっている。李さんによると、こうした信仰は日本だけではなく、韓国や台湾でも共通した部分があるということ、非常におもしろいと思っています。

▽では続いて、北村さんは、李さんとの関わりはいつ頃のことになりますか。

北村 1、2年前ですか。福井県のある神社の木が切られるのをやめさせたいからと、突然訪ねてこられたんです。

李 思いついた次の日に動きました。

北村 李先生は非常に行動派で（笑）。僕の肩書きである樹木医という職業の場合、逆に、「危険なので、この木を切ります」という証明書を出すことも重要な役割の一つです。それが、あの木の場合は逆で、しかも、地元の樹木医さんお二人は、「これはもう危ないので、切るべきです」という判断をくだしていた。ですから、かなり戸惑いました。

もう片方の肩書きである造園業者として、景観の材料としてあの木を見るなら、非常に姿が面白いという見方もできます。それから地域の信仰対象といった見方もできる。そもそも、日本庭園は三尊石から始まるもので、これは完全に浄土の世界に対する信仰です。毎日の造園業者としての仕事は、大型機械を使って木を起こし移植する作業

が多いのですが、韓国も含めた今回の調査に同行して、なぜ枯れていくのか、枯らさないにはどうすればよいかという問題を考える機会になりました。

例えば、多賀大社の近くにあるケヤキの巨木として有名な飯盛木2本は、それぞれ田んぼの真ん中にぼつんと1本ずつ立っています。ケヤキという木が、本来どうい

韓国―風水思想に基づいた堂山信仰

▽では、韓国の調査地について、お話しただけですか。まず、慶州。

李 北村さんも、慶州とソウル、それから釜山も行かれました。

北村 文化遺産、遺構が非常に多い地域で、郊外と言った方がいいと思います。

▽京都や奈良の感じですか。

北村 いや、もっと離れている感覚です。

李 奈良よりも滋賀に近い感じ。

北村 最も近いのは滋賀かもしれませんが、いわゆる田舎なのですが、よく知られた地域は、お寺ばかりです。信仰の対象となっている木は山手にあるものと、平地のものと両方あります。山のものは、ほぼ自然の中で、日本の野神に非常に似た感じでした。

李 韓国では、李氏王朝の時代に、「鎮山」という風水思想が盛んに実践されました。もとは山の信仰なのです。いまも、ソウルの景福宮（朝鮮王朝の王宮）のすぐ後ろには鎮山があるように、都市や集落の後ろには必ず山がある、というか山を背にするように町が造られたのです。山がない平地の場合、わざわざ山を造る。同様に集落の前に風水で必要な「モリ」がなければ木を植えて「モリ」を造った長い歴史があるのです。

※4 三尊石 日本庭園の石組の基本パターン。

仏像の三尊仏のように、中央に大きな石を、その左右に小ぶりの石を組む方法。

場所に育つのか考えると、もともととは、そこに蛇行性の川に沿って森があつたものが、田んぼが開かれ、最終的に1本だけ残ったという歴史があるのかもしれない。

こういった歴史を考えることは、地元住民に、なぜこの木を守らなければならないのかを語るうえでも重要なことです。

合、山が遠い平地だったら、防風林などの役に立つ木を植えなければいけない。その人工的な林が神様と結びついたのは、韓国の特徴かなと思いますね。

▽祠がある場合もありますか。

李 慶州はほとんど祠はありません。祭壇のような石が木の根元に置いてあるだけ。

北村 日本の野神も、行事の時だけ祭壇を置く、もしくは注連縄を張る形が多いです。李 日本の野神と韓国の堂山信仰はとても近いと感じます。ただ、日本の野神はだいたいお盆の8月15日なのですが、韓国は旧暦の1月15日です。昔は年2回、ソウルでは春と秋にあったのですが、だんだん1回になっていきます。

▽先日、北村さんにお会いしたときに、韓国は木が少ないとおっしゃっていました。

北村 日本に比べると少ないですね。それと、木が日本よりは小さい。いわゆる巨木と言われるものでも、400年以上経ったものというのは、見あたりません。中国の場合だと、もっと木は少ない。本来の人間生活では、薪として切ってしまうから。滋賀でも、野洲市の兵主大社へ行ったときにうかがったのですが、昔は境内の木々を絶えず薪にして売っていたそうです。そうやって循環させることで、境内はいつもきれいだっ

だから、僕は、先ほどの大谷さんのお話の中で出た説とは異なる感覚を持っています。鎮守の杜といっても、その木は本当にそんなに昔からあったのかどうか。300〜400年経ったご神木は別にして、それ以外の木々は絶えず切られて、また生えてくり返していたのではないかと。

李 韓国に巨木が少ない理由は、文化的に、韓国では、ご神木を単木で植えることが多く、単木のままで巨木として生き残れないというのがあると思います。

北村 ソウルは、風があまり吹かない。台風もめったに来ず、地震もない地域です。現在でも、ビルの間に10m以上もあるアカマツを植えています。日本だったら、完全に倒れますね。それが簡単な支柱だけで立つのがソウルの風土です。けれど、李先生が言われたように、基本的に単木では生育できない。

▽1本だけだと何が違ってくるのですか。

北村 例えば、ペンギンにしても1頭が立っているのではなく、みんな寄り集まって寒さに耐えるわけですね。それと同じ。



▲慶州望星のケヤキ。望星村を開いた祖先をまつる。すぐそばに小川が流れ、「杜洞」とも呼ばれる。保護樹に指定。

▽風、寒さ、気温などすべて、群れであるかないかで変わってくるわけですね。

李 台湾などの場合は、ガジュマルなどが単木でも十分に。

北村 いけます。幅があるから。

大谷 そして、韓国の巨木は、ほとんど落葉樹、あるいはマツです。日本は常緑樹が結構あるのですが、韓国は植生帯的には難しいのですかね。タブ、シイ、カシ、クスは、おそらく緯度から考えて、育たない。

北村 比較的少ないですね。ソウルは常緑樹がほとんどなかった。

李 だから、神様のご神木、鎮守の杜の樹種はほぼ決まっています。ケヤキ、マツ、イチヨウ、エンジュの4種。研究当初、ご神木は「緑であること」が条件であると考えました。台湾でも、常緑で生命力の強い樹種が多いのですが、韓国の場合はそうではない。常緑樹が少ない地理条件の中で、一番強くて、夏に最高の緑をくれるのはケヤキで、8割以上を占めます。

▽4種のうち、エンジュの木というのが、私にはなじみがないのですが。

李 完全にエンジュは、文化で植えているのです。「エンジュの木を植えると学者が出る」という言い伝えがあって、韓国では科挙の試験に受かって立身出世する者が現れることを願い、必ず村にはエンジュの木が植えられました。ところが、エンジュは

▽ソウル市内の木々は、ビルの谷間のような場所です。守られているのですか。

李 ソウル市の場合は、保護樹に指定されています。立法で、韓国の法律で守られている木なのです。その法律は、1967年、朴正熙大統領の高度成長期に制定されました。その時期によくそんな法律をつくっ

※5 エンジュ マメ科の落葉高木。夏に黄白色の小花が群生して咲き、くびれたさやのある実になる。花と実は薬用、木材は建築・器具などに用いる。

中国の原産で、本来、韓国には少なかったため、エンジュに似たケヤキを代用として植え続けてきたそうです。

北村 木が枯れない条件として一番大事なのは伏流水があることです。韓国の鎮山における「裏山がある」というのは、必ず伏流水の水が出る地だということで、そういう場所ならケヤキも育ちます。

▽山から流れ出た川沿いに木を植えたわけですか。

北村 川というよりも、伏流水。地面の下の地下水がやっぱり一番。日本でも圃場整備で巨木が弱ったのは、周りに溝を掘ってしまったためです。例えば、地下2mまで地下水がある場所でも、ある面をずばっと切ってしまったら、水が断たれてしまいます。韓国でも、下水道が設置された地区で、木が弱ったという例がありました。

李 韓国では、昔から、ご神木が枯れたり、鎮守の杜が枯れたりすると大騒ぎになるのです。村の危機だとして、すぐに植え直したり、祭りをやり直したりします。それは、おそらく、伏流水が減ったことは、米や麦の凶作に結びつくので、木の異変からそれを感じ取ったのだと思います。

韓国——保護樹によって都市に緑を

ものだと思いますが。その結果、ソウル市内に200カ所ぐらい巨木が残されました。行政は信仰よりさらに強かった(笑)。

▽日本でも保護樹はありますか。

大谷 法律とまではなかなか。できているのは、各市町村の条例のレベルです。から。**北村** 弱いですよ。



▲ソウル市瑞草區盤浦にあるイチョウの周りに設けられた公園内。近隣住民が集まってニンニクむきをしていた。

▶ソウル市松坡區文井のケヤキ。近くの役場の新築計画で伐採されそうになったが、地域住民の反対運動で計画が撤回されたことで有名。

別の方法もあるなど感じる場面もいくつかありましたね。ちゃんと木道を敷いて、人間がさわれない形にしておられるところなどは、なるほどなと思いました。住民の憩いの場所にもなっていますし。

李 すべて専門家が関わっているとはいえない。台湾でもその辺が課題で、昨年9月に大騒ぎになった場所は、ちょうど私も調査に行ったところでした。李登輝元総統が命名した有名な木があるのですが、まったく知識のない人が、それに石灰か何かを大量に散布したのです。

北村 石灰は中和剤としては使いますが…。

李 韓国ではそこまでは行きませんが、保護樹に対してつく3億〜4億ウォンぐらいの予算が適切に使われているかというところ…。

大谷 お金は主にどう使われるのですか。

北村 囲いを設けたりして、ポケットパーク化されるのです。保護しながら、みんなの憩いの場所にする。かなり立派なもので、日本で造れば、1カ所が2000万〜3000万円の工費にはなるでしょうね。

李 そういう場所を25カ所つくって、土地自体を買収して公有地化したのです。土地の所有権が個人や自治会にあると、売られたり、切られたりしやすいから。ソウルで一番大きいイチョウは、買収金額が500億ウォン＝50億円ぐらい。これを枯らしたら大変です。

大谷 国民は納得しているんですか。

李 みんな大好きですよ。そこが憩いの場所になるのだし。

大谷 そういう国民性があるのでしょうか。

李 国民性というか、昔、新幹線（KTX）を建設するときに、木を伐採してしまった反省から、いまの方向性は、「都市に緑」なのです。清溪川のように。

大谷 なるほど、その方向性ですね。

※6 清溪川 ソウル市内を流れる川。1960年代に水質汚濁が進み、1971年、暗渠化した上に高架道路が完成した。しかし、2000年代には元の川に戻したいとする世論が高まり、老朽化した高架道路を撤去し河川を復原、水質浄化と親水施設の整備が行われ、現在は市民の憩いの場となっている。

李 緑に関する事業は、みんな大好きです。

北村 だから、現時点で木に対する思いは、日本より韓国の方が進んでいると思います。李 ただ、韓国でも課題は多いです。専門的な樹木医制度もなく、やり過ぎて、木にとっては悪い場合もある。

北村 ソウルでも慶州でも、木の横に、あずまやみたいな休憩所を必ず建てますね。

李 あれは、よくないでしょう。

北村 よくない半面、基礎は簡素ですからあまり地中にも影響はないし、とにかくよい所はそこが老人の憩いの場所になっていることです。中にはテレビが置かれている所もあったし、近所の住民5〜6人が集まってニンニクをむいている姿も見ました。李 夏になると、大量にニンニクをむくんですよ。ソウルのと真ん中でも。

北村 それはそれでありだなと思いました。大谷 日本では、昔から神社が一つの地域のコミュニケーションの場であつたでしょう。韓国でも都市化が進む中で、そういう新しい場所で再現されているということでしょうか。

北村 もともと鎮守の杜は、お祭りなどのいろいろな行事をすることもあるし、非常に多目的な場所だったのですね。

大谷 そうですね。やっぱりその地域、共同体の一つの中心になっている場ですね。ですが、日本では今、子供もお年寄りもない、誰もいない神社が増えていきますね。李 韓国では夏、人々がよく木の下に集まります。そういう文化なのですね。一人、

李 韓国のものは、本当に強いです。

北村 日本は、市町のレベルで保護樹を指定していますが、リストアップして看板をつけるだけ。もう今の日本では、巨木は切られることもほとんどないからですが、それは保護する体制ができていないということでもあります。

李 韓国の保護の仕方をご覧になって、どうでしたか。

北村 せっかくなりのお金をかけるなら、

クーラーのきいた部屋にこもるよりは、木陰で涼む。ソウルの調査の時、中華料理店からジャージャー麺を木の下まで出前してもらって。

台湾——土地公・大樹公は、俗の中の聖地

▽では、次は台湾に移りたいと思います。台湾に行っておられるのは、李さんだけですが、どんな特徴がありますか。

李 一番特徴的なのは、9割近くが単木であることです。林や森はほとんどない。気候からいって植生も違うし、樹種はほとんどがガジュマルです。

▽その差は、南国の植生によるものですか。
李 本来、中国の社は、それぞれ地域に適した木を植えたものです。漢民族が開拓する場合、平地を拓いて村をつくる時、水の流れに沿って「土地公」という神様を設けるために植樹をします。台湾の気候では、一番適していた樹種がガジュマルだったのでしょう。1本でも林を成すまで成長し、木陰をつくり、憩いの場となる。本来、農作業の時に休憩する場ですね。水の守りとしての信仰プラス憩いの場と、さまざまな機能があつたのです。

▽日本でも公開された、『冬の夏休み』(侯孝賢監督、1984年)という台湾



▲台中市松竹路のガジュマルは道路の真ん中にある。1982年、道路の拡張工事で伐採される予定だったが近隣住民の陳情により残された。

北村 ああ、ありました。携帯で電話して頼むと、木の下へデリバリーが来るんです。数を見て歩くと、いろいろな場面に出会えて、おもしろかったですね。

映画があります。台北に住んでいるきょうだいが祖父の住む田舎(銅鑼)に行くお話なのですが、主人公のもっているおもちゃと交換するために子供たちがカメを競争させる場面は、巨木の前に祠がある広場です。
李 それです。おそらく漢民族の中でも、客家人の系統だと思っています。他に先ほど説明した「土地公」の福建省系統などいろいろあるのです。これは「大樹公」と呼ばれますね。昔は、祠なしで石を三つ置くだけでした。東アジアに共通する木の前に祭壇を設ける形ですね。それが巨大化して、いまは大きな廟(びやう)のようなところもあります。ガジュマルは榕樹公(ロンシユーコン)

沖繩——木が浅く、巨木がない理由

▽それでは、次に沖繩です。日本よりも台湾に近いイメージを持っていますが。

李 気候はそうです。文化も台湾同様、風水などさまざまな面で、中国の影響を強く受けています。けれど、独自の文化もあります。沖繩本島の都市である那覇の御嶽と、石垣島・竹富島の両方を調査しています。▽沖繩本島と石垣島や竹富島では、かなり違うのですか。

李 違いますね。沖繩本島は、まず戦争の影響を受けています。多くの御嶽にはリュウキュウマツがあり、ずっと誰も手をつけなかったのですが、戦争になると、市街地の御嶽にあった巨木は防空壕をつくるための木材になり、ほとんどなくなりました。海岸沿いでは、米軍の船が上陸するのを防ぐた

※7 客家 かつて華北から移住してきた漢民族の一派。中国の他、台湾・東南アジアにもひろがる。と呼ばれ、日本の「村の鎮守の神様の」みたいに、「川のそばの一本の榕樹公」という歌もあります。

▽その木の根元は、台湾の人たちにとってとてもなじみがある場所なのですね。

李 そうです。遊び場であつたり、コミュニケーションの場であつたり、信仰の場であつたり。私はずっと「俗の中の聖地」という言い方をしています。日本は聖地としての位置づけが強いのですが、韓国と台湾は、俗とあまり区別がありません。

▽日本だと、集落から離れて神社があつたりしますが、台湾ではすぐ横に大きい飲食店街があつたり。まさに生活の中にある。

李 その木の下で、マージャンを楽しんだり、お茶を飲んだりするんです。年配の方は、ほとんど日常をここで過ごす。寒くないし、年がら年中、人がずっといるのです。

めに、切り出して積まれました。

戦後に都市化が進むと、保護樹とするなどの条例も何もないから、とことん切られました。日本軍の基地があつた地域の御嶽で戦闘が一番激しかったところは、米軍が全部爆撃して、戦後には草一本残らなかったものもあります。だから、沖繩は本当に木が浅いのですね。巨木がない。初めて訪れた時、なぜこんなに樹齢が少ないのだろう。台風でみんな倒れたかなと思つたら、そうではなく、戦争で全部火の山になったからだということです。

大谷 ベトナム戦争での枯れ葉作戦と一緒でしょう。隠れる場所を徹底的に破壊した。李 そうです。那覇市も全部焼かれたのです。那覇市では、焼き物が盛んだった壺屋

という地域だけが幸い残されました。数百年の歴史をもつ窯の所だけ、こんもりした神様の森が無事でした。ここは、歩いていて偶然見つけました。市街地のど真ん中に、突然、森が現れたのです。

近年、沖縄本島で問題になっているのは、カミキリムシが爆発的に増えていることです。台湾でも私が調査したうち7割近くのご神木が感染しており、大問題になっています。老木は虫がつきやすいです。

滋賀―長寿の木はその地が長くよい環境であった証拠

▽それでは、最後は滋賀県です。滋賀は、何カ所ぐらい回られたのですか。

李 20カ所ぐらいです。メーンは長浜市高月町の野神と犬上郡甲良町の巨木です。▽どういう理由で選ばれたのですか。

大谷 高月のツキの字は、いまはムーンの方の「月」になっていますが、元は大阪の高槻と同じ字で、「槻」は要するにケヤキのことです。滋賀県でも、南部はどちらかというと照葉樹であるシイやカシの多い植生ですが、北の方にいくほど、常緑樹が少なくなくて落葉樹が多くなります。山の裾や平地の辺り、特に川沿いには、昔からケヤキやエノキを中心とした植生が形成されました。高月町とその周辺には、ケヤキの巨木が非常にたくさん残され、それが野神などの形で信仰の対象になっているのです。特に柏原の八幡社のケヤキのご神木を李さんと韓国の研究者の方が調査されて、「これはすごい木だな」と皆さん驚かれて。

甲良町の方は、歯痛に効くなどのいわれがあるヒイラギが、ご神木として非常に珍しいということ調査の対象としました。

李 十数回、滋賀に通っていて、不思議に思っていたのですが、日本ではなぜエンジュが少ないのですか。

北村 カミキリは、幼虫が穴を開けて中にいるんです。ただ、穴を開けただけでは、簡単に枯れるようなことはありません。今のは、それについている菌が問題となっているもので、カシやナラも被害にあいます。

李 沖縄で最も感動した場所は、石垣島の小浜御嶽です。サンゴ礁の白い砂の上に参道として、神の道がつくられていて、周りは原生林に近いような豊かな植生が残っています。

北村 鳥が運ぶというかたが多いですね。大谷 そう、鳥が多いですね。ムクの本なども、鳥が運んできますし。

北村 ほとんどの場合、あの辺の木は実生だと思っています。

大谷 エノキは本当に実生が多いのです。植えたのでなく、種から芽が出て大きくなる、要するに自然体ですね。こういう平地で、特にケヤキなどが大木にまで生長できたということは、その木をめぐる土や水、光、空気などさまざまな環境要素と、人為的な要因の両方が、非常に良好な状態で長年保たれてきたということです。樹齢500〜600年の木が生き抜いてきたことは、その地域が素晴らしい環境であったことの一つの象徴と考えることもできます。

李 その土地で強い木ということですね。大谷 そうです。逆に環境に合わない木を植えれば、生き永らえさせるために、かなり手間も費用もかかるとするのは当然です。

李 写真を並べて見ているとは思いました。石垣島は1771年の八重山地震による大

▼沖縄県石垣市宮良の小浜御嶽。八重山地震後、小浜島から石垣島へ移住した人々が、小浜島の御嶽の分神を勧請した。入口にアコウの巨木がある。



※8 実生 種子から発芽して生じた植物。挿し木・取り木に対していう。

※9 八重山地震 明和8年（1771）4月24日（旧暦3月10日）、石垣島南東沖を震源として発生した地震。マグニチュード7.4と推定され、石垣島南東部を30mの大津波が襲った。死者・行方不明者は八重山諸島と宮古島で約1万2000人。

津波で、島が3分の1ぐらい呑み込まれる大打撃を受けたそうです。その津波後に大事な四つの御嶽の木を新たに植えたという記録が残っています。大きな災害があつて倒れても、また植えたりして地域の人たちがすぐく関心を持って守ってきたのです。

北村 それは神が宿る聖地だったからこそでしようね。無闇にふてはいけないという禁止とともに、地域に不可欠のものと考える両面があった。神抜きでは難しいかもしれません。

▽その木に関する伝説や言い伝えがあるのとないのとでも、変わるでしょうね。

大谷 精神的な面も大事にしながら、それプラス自然科学的な環境の面、鳥などの生息の場になっているとか、生態系という見方。それらをミックスさせた形で訴えていくことが大事ですね。

▽そろそろ時間です。本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。（2011年1月15日、サンライズ出版にて）

横井金谷筆 山居図

滋賀県立琵琶湖文化館学芸員
上野良信

山居図は、深い谷間にひっそりと建つ庵の中で、静かな時を過ごす隠士の姿を描いたものです。背後の山々は高くそびえ、その間から滝水が流れ落ちていきます。世間の雑踏から逃れ、聞こえてくるのは滝の音と鳥の声ぐらい、文人たちが強くあこがれた理想郷ともいえる風景です。

作者は、江戸時代後期の文人画家横井金谷（1761～1832）。金谷といえば、自らが挿画入で綴った自伝『金谷上人御一代記』により、一躍有名になりましたが、ようやく作品が追いついてきたようです。金谷は、現在の草津市下笠町に生まれ、9歳で出家し、21歳の若さで京都北野の金谷山極楽寺の住職になりました。この頃から本格的に絵を描いたようで、寺の山号を画号とし、ほぼ生涯を通して絵に「金谷」と署名しています。一般に金谷は、与謝蕪村の門人として扱われていますが、直接師事したことはなかったようです。しかし、その画風を慕い、画題、画面構成など、多くを学んでいます。この山居図も蕪村画を参考にしたもので、細墨線を用い

て、丁寧に描いています。岩や土坡の皴の表現などに、蕪村画の影響が顕著です。画中の墨書により、金谷38歳の時の作であることがわかります。金谷画初期の初々しさが残る優品です。

ここで注目されるのは、「KINKOK」とローマ字で彫られた印章を使用していることです。金谷は『御一代記』の中で、長崎に旅行した時の様子として、オランダ人や船をスケッチしたり、外国語にも非常に興味を持ったことを書いており、何事にも好奇心旺盛な金谷が、自らを「KINKOK」と彫っても不思議ではなく、むしろ自然な感じがします。不思議といえば、数ある金谷画の中にあっても、この印を捺した作品は他には見つかりません。

金谷は生前、「余の画を評するのは宜しく死後に於いてすべし」と言いました。その時が来たようです。今日画家としてとみに注目されるようになった横井金谷です。



◀ローマ字の印章

特別展 湖北真宗の至宝と文化

親鸞聖人七百五十回忌にあわせ、湖北・長浜地域における浄土真宗の歴史と文化を見直します。どのように浄土真宗が浸透していったか、織田信長との激しい戦いの時代を経て、江戸時代の安定した新宗教団がいかにして確立されたのか、地域に残る文化財を中心に探ります。2会場で展示。

第1会場(総合展示)

3月12日(土)～6月19日(日)

長浜市長浜城歴史博物館 2階展示室

〔休館日〕6月8日(木)

〔入館料〕大人400円、小・中学生200円

第2会場(浅井郡の至宝)

3月19日(土)～4月28日(木)

浅井歴史民俗資料館 郷土学習館 1階展示室

〔休館日〕会期中無休

〔入館料〕大人300円、小・中学生150円

記念講演会

5月1日(日) 午後2時～4時30分

〔真宗の展開と湖北(仮題)〕

〔講師〕草野顕之氏(大谷大学学長)

〔会場〕大通寺 新御座(長浜市元浜町32-9)

〔受講料〕一般500円(長浜城歴史博物館友

の会会員は無料)

〔お問い合わせ先〕

長浜市長浜城歴史博物館

TEL 0749(63) 4611

浅井歴史民俗資料館(長浜市大依町528)

TEL 0749(74) 0101

野洲駅開業120周年展 鉄道・駅・まち

4月23日(土)～6月26日(日)

野洲駅開業120周年にあたり、鉄道、

駅やまちのあゆみを資料や写真で紹介し

〔休館日〕月曜日(5月3日は開館)、5月6日
 〔入館料〕大人200円、学生150円、
 小中学生100円(野洲市民は入館無料)
 〔お問い合わせ先〕野洲市歴史民俗博物館(銅鐸
 博物館) TEL 077(587) 4410

第3回 シンポジウム びわ湖の森の生き物
源流を守る 源流で守る 生き物たちの力

5月29日(日) 午前9時～午後4時30分

安曇川の源流のトチノキの巨木林の重要性を、源流の森と集水域に生育・生息する生き物の関係からとらえ、科学的な視点で考察します。

午前の部 能家の大トチ見学会(午前9時～11時30分)

見学地 高島市朽木能家の山林

定員 30名

参加費 800円(入山料、保険料、資料代等)

参加方法 はがき、ファックス、電子メールで、下記までお申し込みください。希望者が定員を超えた場合は抽選となります。

応募締切 5月20日(金)

午後の部 シンポジウム

会場 文化交流施設 やまびこ館
(高島市朽木市場792)

定員 300名 参加費 無料(事前申込不要)

I 講演&話題提供

「安曇川源流のトチノキの巨木林」青木 繁
 (朽木いきものふれあいの里)

源流の森と生き物たち

山崎 亨・寺本憲之・藤岡康弘・名和 明
 (びわ湖の森の生き物研究会)

II パネルディスカッション

“びわ湖の森”を元気にするための意見交換および提言

パネリスト 嘉田由紀子(滋賀県知事)、青木 繁、藤岡康弘
 伴 正男(巨木を育む豊かな森と水源の郷をつくる会)
 阿部勇治(多賀町立博物館)

コーディネーター 山崎 亨

お問い合わせ・お申し込み先

巨木を育む豊かな森と水源の郷をつくる会

〒520-1415 滋賀県高島市朽木柏341-3

県立朽木いきものふれあいの里内

TEL 0740(38) 3110 FAX 0740(38) 3212

E-mail: k-fureai@zb.ztv.ne.jp



▲野洲駅(昭和40年代、
撮影:藤村和夫氏)

▶野洲駅の駅名標
 (野洲市立歴史民俗博物館蔵)

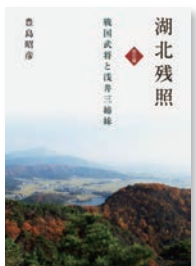




姫たちのふる里 近江戦国スケッチ紀行

画／寺田みのる・文／木村至宏
170×190mm 上製本 総80頁 定価2310円
書店にて発売中

信長・秀吉・家康が天下人を目指した舞台・近江は、浅井三姉妹ら姫たちのふる里。城跡や古戦場などを水彩画と解説文で紹介し、戦国の世へと誘う。交通案内、スケッチポイント地図付き。



湖北残照〈歴史篇〉

戦国武将と浅井三姉妹
豊島昭彦 著
A 5判並製本 総258頁 定価1680円
書店にて発売中

小谷城址、姉川古戦場、佐和山城址、安土城址…。長政と三成を中心に信長や秀吉ら武将たちと、お市、茶々・初・江ら浅井三姉妹ゆかりの史跡を訪ねる、臨場感あふれた戦国紀行。



無辜の人たち 一被差別の蒼氓から—

山村勉 著
四六判上製本 総223頁 定価1575円
書店にて発売中

私の裡には「そうではない、部落の人間は、ほとんどが無辜なのだ」そんな想いが強くあったからです。——情報誌に掲載した原稿と、自らの経験や教員生活での体験をモチーフにした3点の短編小説からなる。



句集 独白

中嶋ひろむ 著
B 6判上製本 総113頁 定価1890円
書店にて発売中

半熟のたまご いい人かも知れぬ／どう座り直してみても馬の上——ユーモアか？ ペーソスか？ 読む人の捉え方ひとつで変わる言葉の連なり。筆者の独特のセンスで繰り広げる現代川柳の世界へようこそ。



オーストリア辺境の旅

渡辺佐 著
A 5判上製本 総222頁 定価2100円
書店にて発売中(好評につき残部わずか)

朝比奈隆率いる大阪フィルハーモニー交響楽団、初の欧州公演の記録「聖フロリアンの鐘」。名演ブルックナー交響曲第7番の誕生秘話が新訂版で甦る。また、中世ヨーロッパの面影を残すオーストリア辺境の歴史遺産を訪ねる。(2010.7.16刊)



近江作庭家の系譜

小堀遠州・鈍穴・西澤文隆
角省三 著
B 6判並製本 総224頁 定価1000円
好評につき品切れ

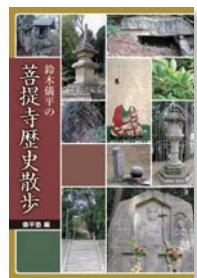
江戸初期に独自の美を究めた小堀遠州、幕末維新期に築庭では鈍穴と号した茶人勝元宗益、現代建築に大きな影響を与えた昭和の建築家西澤文隆。近江に生まれ育った作庭家（建築家）3人の人物評伝。(2010.11.13刊)



区誌 棕川 —資料が語る山里の暮らし—

澤田純三 著
B 5判並製本 総108頁 非売品
お問い合わせ先 高島市今津町桜町二丁目8-7

福井県との境に位置する山村・棕川（高島市今津町）に生まれ育った著者が、共有文書や検地帳などの資料をもとに中世以降のわがふる里の移ろいをたどる。(2010.12.1刊)



鈴木儀平の菩提寺歴史散歩

儀平塾 編
B 5判並製本 総226頁 頒価800円(送料込)
お問い合わせ先 湖南省菩提寺2093-248

木本定利(儀平塾代表)

本誌101号で紹介した地域誌がついに完成。郷土史家・鈴木儀平氏の講義をもとに、菩提寺区に残る数多くの石造文化財、歴史ある神社仏閣、山の緑化に取り組んだ偉人・龍池藤兵衛の業績などを紹介。(2011.1.25刊)

別冊 淡海文庫19 近江植物風土記

滋賀植物同好会 編
B 6判並製本 総184頁 定価1890円

書店にて発売中

万葉集に詠まれたアカネとムラサキなど、近江の植物は人々の営みと深く関わってきた。県内各地を聞き取り調査し、衣食住や風俗、伝統行事に関する故事来歴と現状を紹介。

江・浅井三姉妹博覧会公式ガイドブック 戦国の聖地を巡る

江・浅井三姉妹博覧会実行委員会 編
A 5判並製本 総96頁 定価1260円

書店にて発売中

大河ドラマ「江」のふるさと北近江。浅井三姉妹が生まれた小谷城址や姉川・賤ヶ岳古戦場、石田三成出生地など、数多くの史跡「戦国の聖地」を巡るための必携ガイドブック。

彦根城の諸研究

—海津榮太郎著作集—
海津榮太郎著作集刊行会 編
B 5判並製本 総304頁 定価5250円

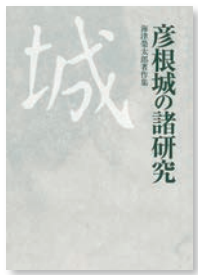
書店にて発売中

城郭研究の草分け・海津榮太郎による、築城慶長8年説・9年説をはじめとする彦根城に関する研究論考を再編。解体修理時の写真、建物図版、参考文献等も収録した必携書。

特集座談会の中で地震による大津波のことが語られています。これは東北関東大震災発生よりも2カ月近く前の発言で、まったくの偶然です。

各地の巨木を写真でなるべく多く紹介したのですが、わずかしが掲載できませんでした。調査地の巨木の写真と、それにまつわる伝承などを紹介した李春子さんの本が、弊社より近日発行予定ですので、しばらくお待ちください。

㊦



近江の祭礼行事2 川道のオコナイ

—湖北に春を呼ぶ— 俵鏡餅—
中島誠一 著
A 5判並製本 総128頁 定価2520円

書店にて発売中

湖北地域で継承されるオコナイの中でも最大規模を誇る長浜市川道町の行事に密着。餅搗き、献饗、本膳など、知られざるその全貌を300点ものカラー写真で紹介。

近江学研究紀要 近江学 第3号

成安造形大学附属近江学研究所 編著
A 4変形並製本 総92頁 定価1890円

書店にて発売中

商家の前垂れ、戦国時代の城郭、幕府官僚としての小堀遠州、水辺を描く現代油彩画など、各ジャンルの第一人者が多様なテーマで「近江」の地域文化が内包する歴史と美を考察。

電車と青春 21文字のメッセージ2011

—初恋・ありがとう—
石坂線21駅の顔づくりグループ 編
新書判並製本 総90頁 定価630円

書店にて発売中

電車に乗り あなたを探す毎日が 恋の1時間目【初恋賞受賞作品】。全国からの応募作品約2000通の中から俵万智さんが選んだ入賞作品100点を収録。



表紙写真

台湾南投県・崎仔頭のカジュマル

提供：李春子（本文写真もすべて）

福德廟と榕樹公の祠があり、村人の寄付で舞台やテーブルのある小公園となっている。



Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

お申し込み先

〒522-0004
滋賀県彦根市鳥居本町655-1
サンライズ出版株式会社
Duet編集部
TEL (0749) 22-0627
FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。
<http://www.sunrise-pub.co.jp/>